

骨食い太郎

[骨が溶ける難病とガンの克服を描いた童話と手記]

松下かつとし

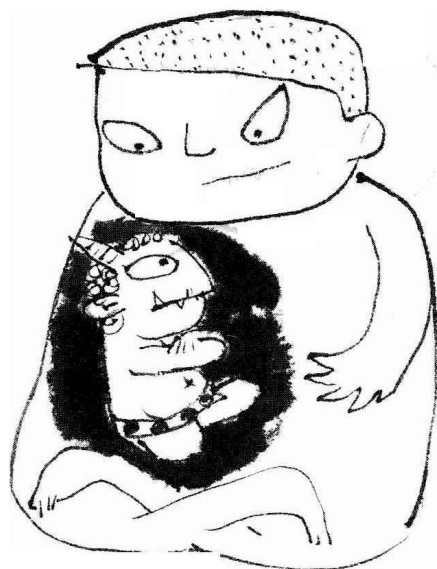
鈴木靖将 絵



松下かつとし

鈴木靖将 絵

骨食の太郎



〈著者紹介〉

松下かつとし(まつしたかつとし)

1943年 東京都に生まれる。本名は松下捷利。
1961年 17歳で骨溶解性疾患発病。
1962年 千代田テレビ専門学校卒業。その後可能な仕事を求めて職を転々とする。
1977年 生活の場を関西へ移す。
1980年 個人通信「ひしょう」を創刊。このころから難病患者団体や障害者団体などの活動に積極的にかかわる。
1983年 難病の女性と結婚。
1987年 血液のガンが発病。
1988年 右腕を切断し、現在にいたる。

鈴木靖将(すずきやすまさ)

1944年 滋賀県に生まれる。
新制作日本画研究会で日本画を学び、現在、創画会所属。日本画家。
著書に、絵本「アンデレのふしぎな夜」「ともしび」(日本基督教団出版局)「はたるぶくろ」「水仙月の四日」「おせん淵」(サンブライト出版)「うばすて」(トモ企画)などがある。

骨食い太郎—骨が溶ける難病とガンの克服を描いた童話と手記

1990年 6月26日 初版第1刷発行

〈検印廃止〉

1990年 7月30日 初版第2刷発行

定価はカバーに表示しています

著 者 松 下 かつとし

発 行 者 杉 田 信 夫

印 刷 者 坂 本 嘉 廣

発行所

株式
会社

ミネルヴァ書房

607 京都市山科区日ノ岡堤谷町1

電 話 (075) 581-5191 (代表)

振 替 口 座 京 都 2-8076 番

©松下かつとし, 1990

内外印刷・新生製本

ISBN 4-623-02006-1

Printed in Japan

骨食い太郎とチョロマツのこんくらべ

ちよっと昔のことでした。あるところに
チョロマツという若者がおりました。

チョロマツは家の手伝いもせず、
いつも遊びまわっておりました。

ある日のこと、チョロマツが川で遊んで
いるときに、左ひじにコブのようなものが
ポツコリとできていました。

「なんだ、これは」

しかし、そのときは、いたくもかゆくも
なかったので、チョロマツは、気にも
とめずに、また、遊びつづけました。



いく日かたって、

コブが急にいたみはじめました。

「あいたたた……」

そのとき、コブの中から声がしました。

「おいらは骨食い太郎。」

骨食い族の長男。

これからは、ここがおいらのすみかだ」

「いたくてたまらん。

はやくオレの体から出ていけ」

「もうおそいよ。おいらはおまえの

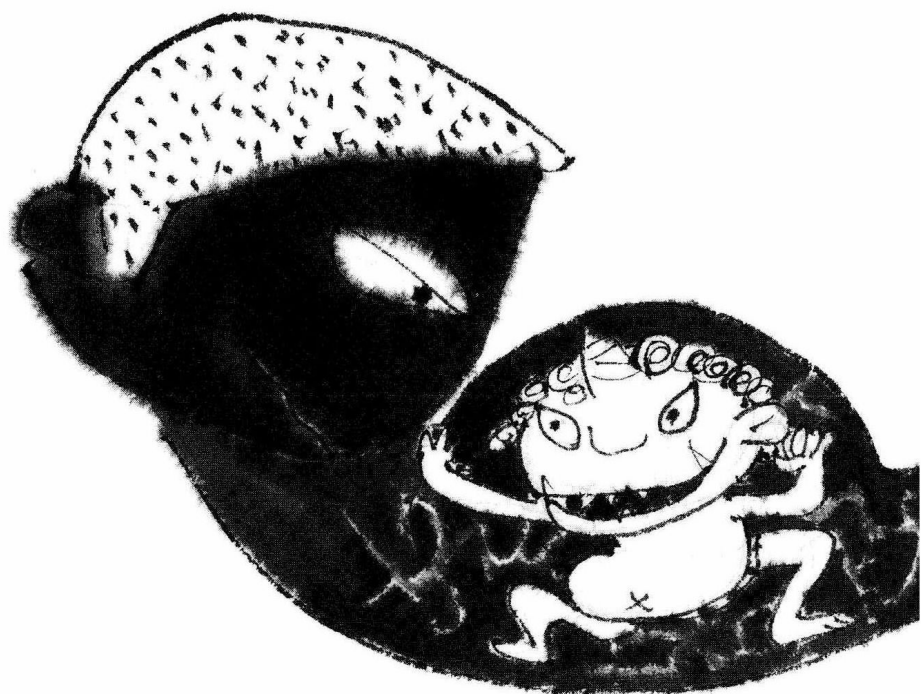
体じゅうに、かくれがをつくったのさ。

おい出そうとしてもダメだ。

おまえが死ぬまで、おいらは

おまえの骨をしゃぶるんだ」





チヨロマツの親は心配して、

あっちこっちの医者へ

チヨロマツをつれていきました。

「悪い病魔がとりついて、

せがれの体じゅうの骨を

食べるというとるそうです。

なんとか治してやってください。

なんとか……」

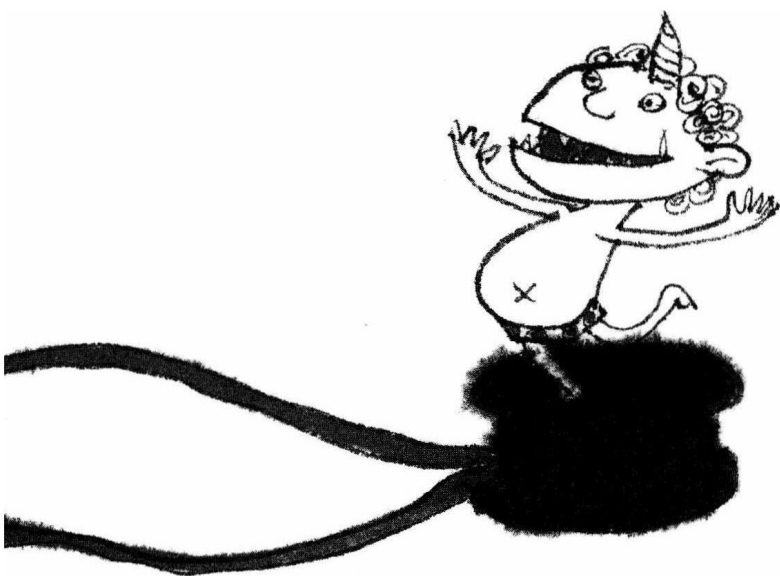
しかし、どこの医者も、

判でおしたように同じこたえてした。

「これは治しようのない病氣。

いたみどめのクスリだったら

つくってあげられるんだが……」



チヨロマツはすっかりおちこんで、
遊びにもいかず、寝ついてしまいました。

「いたいよう、いたいよう。」

いたくて、夜も眠れんよう」

骨の中から、笑い声が

きこえてきました。

「クッククック。」

なあ、チヨロマツよ、

おまえは病人なんだから、

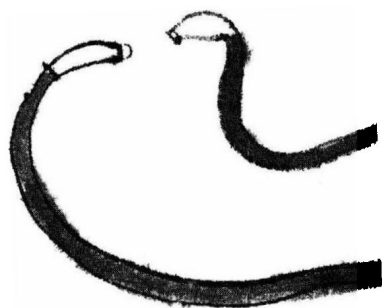
じつと静かにしていなくちゃ

ダメなんだぞ。クッククック。

それにしても、おまえの骨は

うまいなあ。おいらの舌を

とろかすようだ」



チヨロマツは腕がいたむので、前にもまして家の仕事をしなくなりました。

「チヨロマツ、ちょっと手を貸してくれ」

と、父親がたのみました。

でもチヨロマツは、

「オレは腕がいたいから、手伝いなどできん」

といって、ゴロゴロ、ゴロゴロ、一日じゅう

家の中で寝っころがっておりました。

「オーイ、チヨロマツ。

おまえは病氣なんだから、

らくさせてもらったらいいんだ」

と、元氣そうな骨食い太郎の声がしました。





「医者は治してくれないし、

このまま骨を食われつづけるのかなあ」

チヨロマツはイライラして、

家のものにつらくあたりました。

「なんでオレだけ、こんなめにあうんだ。

かあちゃん、どうしてオレを

こんな体に生んでくれたんだ」

それをきいて母親は、たいそう悲しみました。

骨の中からまた、声がしました。

「そうだ、そうだ。おまえの親が

わるいんだ。おまえを生んだ親が

わるいにきまっとる。

思う存分、親をうらんだらいいんだ。

クッククック」

ある晴れた日、チヨロマツは
気をまぎらせようと思って
久しぶりに家を出ました。

おひさまポカポカ。

野山に花がさきみだれ、

小鳥がさえずり、

チヨウが舞っていました。

「ああ、気持ちいいなあ」

チヨロマツは新鮮な空気を、
胸いっぱい吸いこみました。

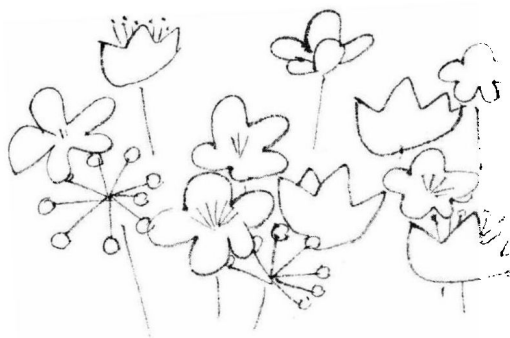


苦しそうな声がします。

「オーイ、チヨロマツ。

おまえは病人なんだから、家で

じっと寝てなきやダメじゃないか」



チヨロマツは、足どりもかるく
家へ帰ってきました。

「かあちゃん。このあいだは

かあちゃんを責めてすまなかった。

オレが病気になったのは、

だれのせいでもない。

とうちゃん。オレ、家で

じっとしてしないで、はたらくよ」

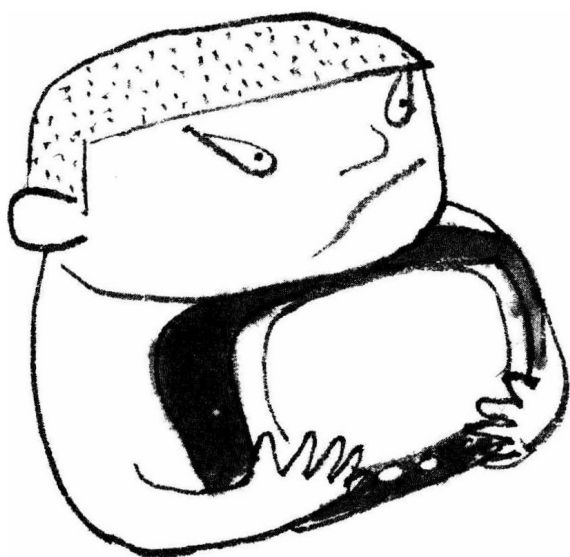
それからチヨロマツは、家の仕事を

手伝うようになりました。

しばらくすると、元気も出て、

腕にも力がついてきました。





何年かたち、

チョロマツは元気にはたらいで、
たくましい大人になりました。

骨食い太郎も、

チョロマツの元気におされて、
おとなしくしていたようです。

ところがある日、

「ポキッ」

という音とともに

左腕が折れてしまったのです。

骨食い太郎の

よろこぶ声がきこえました。

「ワッハッハッ。大成功、大成功。

オーイ、チョロマツ。おいらの

いうことをきかないから、

こんなことになったんだぞ」

チョロマツは仕事ができなくなっ

て、家でじっとしていました。

そのあいだに、

骨食い太郎は大あばれ。

